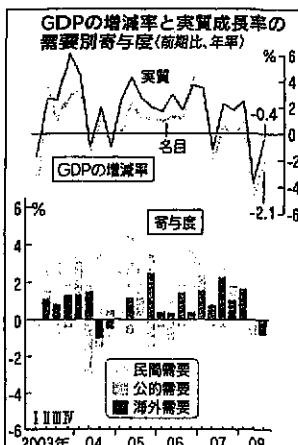


GDPマイナス0.4%



2008年7—9月期の
GDP増減率の内訳
〔カッコ内は2008年4—6〕

	月期、前期比%、△(±)	実質	名目
G D P (年率換算)	A0.1(A0.9) A0.4(A3.7)	A0.5(A1.2) A2.1(A4.6)	
個人消費	0.3(A0.6)	0.3(A0.4)	
住宅投資	4.0(A3.1)	5.5(A1.7)	
設備投資	A1.7(A1.4)	A1.1(A0.8)	
政府消費	0.1(A0.1)	0.5(A0.3)	
公共投資	0.4(A5.5)	1.8(A3.9)	
輸入	A0.7(A2.6)	A3.2(A0.5)	
輸出	1.9(A3.0)	7.9(A4.0)	

日本	米国	(注)歐州は
財政、金融政策で協調する方針を確認した。ただし、一連の対策は具體性を欠いており、世界経済に流れ込むとの声も浮上している。	に向け、金融安定化策などを確立した。	
米欧の金融危機は実体経済に及ぼす影響が大きいため、	一方で、財政、金融政策で協調する方針を確認した。ただし、	
米国は、世界経済に流れ込むとの声も浮上している。	一連の対策は具體性を欠いており、世界経済に流れ込むとの声も浮上している。	

	4-6月期	7-9月期
日本	▲0.9	▲0.1
米国	▲0.2	▲0.2
欧州	0.7	▲0.1

は、世界競争率の低迷が日本国内の企業部門の生産を直撃して、輸出の伸びが確認されない。輸出の伸び悩みが生産の抑制につながり、企業収益の悪化や設備投資の減少をもたらすなど、通商環境に脆い外需にも敏感に直しの兆しが見られない。反動増期が期待された輸出の反発性もある。

今回の GDP 総計では、世界競争率の低迷が日本国内の企業部門の生産を直撃して、輸出の伸び悩みが確認されない。輸出の伸び悩みが生産の抑制につながり、企業収益の悪化や設備投資の減少をもたらすなど、通商環境に脆い外需にも敏感に直しの兆しが見られない。反動増期が期待された輸出の反発性もある。

期は株安による投資需要減少によるものと見られる。景気刺激効果は不透明で、日銀の追加利下げによる可能

設備投資落ち込む

た実質で前年比〇・一九減、年率換算で〇・四三減となりた。約七年ぶりに一・四二期連続のマイナス成長を記録した。世界的な金融危機と景気低迷を受けて企業の設備投資が減少し、輸出や個人消費も伸び悩んだ。七月九月期は日米欧がいずれもマイナス成長となり、世界同時不況の懸念が広がってきた。(関連記事3回)

景気は後退局面

相財経

卷之三

卷之三

110

日米歐、マイナス成長

実質GDPの年間別に見ると、内需では設備投資が前期比一・七%減で、四一六月期の〇・六%からの反発力は弱い。過去の数値を見直した結果、四一六月期の実質GDPは前期比年率三・三%で、品目別で見ると、内需では設備投資が前期比一・七%減で、四一六月期の〇・六%からの反発力は弱い。

経済

輸出の輸入を
差引いた外需は〇・二
年のマイナスで、〇一年
七月九月期以来の大きな
ペースで回復している。

輸出の輸入を
差引いた外需は〇・二
年一・四四倍の伸び
に転じた。延長でエア
コンや衣服の販売が伸
び、北京五輪の効果で薄
綿の輸出が伸びた。

輸出の輸入を回
復した外需は〇・二
年一・四四倍の伸び
に転じた。延長でエア
コンや衣服の販売が伸
び、北京五輪の効果で薄
綿の輸出が伸びた。

輸出の輸入を回
復した外需は〇・二
年一・四四倍の伸び
に転じた。延長でエア
コンや衣服の販売が伸
び、北京五輪の効果で薄
綿の輸出が伸びた。